

第1章 面接試験の概要と対策方法

第1節 面接試験の形態と留意事項

教員採用試験における面接試験は、**個人面接**（受験者1人に対する複数の試験官が面接を行う形式）と、**集団面接**（受験者が個人面接と異なり複数となる）である。なお、人物試験のカテゴリーとして、集団討論（グループディスカッション）、模擬授業、場面指導などがある。本書では第1～3章に面接試験を、第4章にこうしたその他人物試験の対策法を掲載している。

さて、文部科学省は度々、「公立学校教員採用選考試験の実施状況」を発表している。これによると、第1に、**個人面接は必ず行われる**といつてよく、その多くが2次試験で課されていると分かる。ちなみに、2次試験は個人面接に加えて、上記波線の人物試験をセットで課しているところが多い。

第2に、**7割弱の自治体が集団面接を実施している**。これは1次試験で課ところが多い。第3は、第2に関連するが、**5割強の試験自治体が1次試験から何らかの人物試験を課している**。

以上から、1次試験では集団面接などで人物適性を大まかに検査し、2次試験において、教員としての適性を複数の試験でしっかり採点しようとしている自治体が多いことが分かる。

教員採用試験は**人物重視の試験**といわれる理由がここにある。したがって、しっかり準備をしなくてはならない。

(1) 個人面接の留意点

個人面接では、じっくり受験生の言動を確認できる。したがって、**受験生が話した内容に「つつこむ」ように質問ができる**。例えば、「どのような教員を目指しているか」と質問をし、「児童生徒と一緒に成長していけるような教員になりたい」と答えた場合、「指導という言葉があるように、児童生徒を導く役割が教員にはあると思うが、どのような意味で一緒に成長したいとおっしゃっているのか」とさらに問えるのだ。

この「つつこみ」に十分答えられないと、表面的な発言しかできていないことになる。そうすると、教職への熱意や能力・適性などが疑われてしまう。

なお、この「つつこみ」の際に、**圧迫質問という形で威圧的に問われる場合もある**。これは、受験生のストレス耐性をみるものである。近年、メンタルの不調で休職や離職をしてしまう教員もいる。これは、受験生の人間的な弱さだけが要因ではないものの、少しくらいの緊張感漂うコミュニケーション形態にくじけない姿は、面接官側（過半数は校長職の教員が担っている）としては確認したいものである。面接官の振る舞いにあまり動揺せずに、冷静に臨もう。

(2) 集団面接の観点

集団面接では、他の受験生との比較がなされる。受験生が思っている以上に、面接官側は、この集団面接で、受験生間の差異に気づくことができる。例えば、他者の発言に敬意を払い傾聴している受験生と、自分の順番での発言を気にしてばかりいる者では様子が違うものだ。あるいは、発言をまとめていて分かりやすく説明する力、発声、表情も比べられてしまう。

集団面接は(1)の個人面接と違い、発言に対してつっこまれることがほとんどない。かつ聞かれることもオーソドックスなものが多い。**事前にしっかり準備しておけば、当日、他の受験生の発言に気を配ることも可能だし、自身の発言の調子も整えることができる。**面接官は、それを見越して受験生を評価している。準備をしっかり行い、プレゼン力をしっかり身に付けよう。

また、集団面接では、他者との発言被りという事態が生じやすい。志望動機や自己PRなど、譲れない思いを述べるところならいざ知らず、最近気になるニュースなどでの重なりはできれば避けたいところだ。これも複数発言を準備していれば、慌てないだろう。

以上から、**集団面接は、他の受験生に比べられても大丈夫な自分を準備してきたか、その通りに振る舞えているかを見られている。**まだ最終試験の個人面接ではないとか、他の人が発言をしている間に考えれば大丈夫だろうとかと甘えた気持ちで準備しないように留意して欲しい。

第2節 面接試験の質問分類

面接試験は、(1)自分自身の教職への熱意を示しアピールするような根幹質問と、それ以外の質問に大別できる。後者は、面接官が適性を見る際に、(2)教育実践者として適性があるかを知らうとしてなされる質問と、(3)多面的に受験者の人物を評価するための質問がある。

本節では、具体的にどのような質問がここに分類されるかを以下に示す。なお、具体的な発言へのアドバイスは第3章にまとめて記載している。

(1) 教職への熱意を伝える質問例

- ・なぜ教員を志望していますか。
- ・なぜ〇〇県（あるいは××市、受験自治体が入る）の教員になりたいのですか。
- ・どのような教員になりたいですか。
- ・子どもたちにどのように育って欲しいですか。
- ・保護者とはどのように関係を構築するつもりですか。

(2) 教育実践者としての適性を伝える質問例

- ・自己PRを述べてください。
- ・あなたの教員に向いている点を教えてください。
- ・教育実習（講師経験者は勤務経験）中に成長した点は何ですか。
- ・教員の不祥事についてどのように思いますか。
- ・クラスでいじめが起こっています。どう対応しますか。
- ・今回の学習指導要領においてどのような点がポイントだと捉えていますか。

(3) 多面的に自身の魅力を伝えるための質問例

- ・最近気になるニュースは何ですか。
- ・友人は多い方ですか。
- ・ストレス解消法を教えてください。
- ・自分とは教育観が違う同僚とはどのように接しますか。
- ・教員としてのキャリア観を教えてください。

第3節 面接試験対策の考え方

面接試験においては、よく聞かれる質問に対し、予め自分の発言を決めておくのが定石だ。この点について、以下の(1)～(4)の順に進めると良い。その後、(5)に気をつけるわけだが、その気をつける中身は第2章で紹介している。

(1) 評価される人物像を知る

自治体の募集要項には、**求める教員（教師）像**というのが必ず挙げられている。これに目を通し、その力を有していることを示さなければならない。もちろん、求める教員像の全てを有していると胸を張って言える人は少ないだろう。その場合でも、自分の不足する項目を高めて、理想的な教員に近づこうとする意志は示さなければならない。**自身のアピールポイントと謙虚に成長を誓う箇所をしっかりと確認しよう。**

(2) 根幹質問に対する発言内容を練り上げる

根幹質問とは、志望理由と自己PR（長所含む）、そして本書第3章で挙げる問1～問10である。自治体の教職に就く者としての熱意・適性・能力を如何なく伝えられるようにしよう。特に、志望理由や長所を含めた自己PRについては、本章第4節で取り上げているのでしっかりと準備していただきたい。

(3) その他質問に対するタブーや低評価に気をつける

(2)以外の質問を「その他質問」とした場合、これらには、タブーや低評価となる発言をしないように心がける必要がある。何がタブーや低評価となるかは、第3章の該当箇所にあるのでよく確認しよう。

(4) 発言練習をし、「つっこまれる」ことに慣れる

面接指導をしていると、教員を目指す人の中には、自身の発言に対して「つっこまれる」ことと、不十分で望ましくない発言をすることをイコールに考える人が多いように感じる。しかし、これは誤った思考である。面接官は、受験生の発言を誤解なく理解しようとして、詳しく聞いているだけの可能性もあるからだ。したがって、「つっこみ」には落ち着いて対処して欲しい。

関連で、仏頂面の面接官にも物怖じせずに発言しなければならない。学校や教員の指導に協力的でない保護者対応力も面接では測られていることを肝に銘じ、逆境でも堂々と発言できるように練習を重ねよう。

(5) 低評価とならないようマナーを知り、所作を身に付ける

教員である前に、一人の社会人である自覚を持ち、マナーある所作を覚えて、振る舞えるようにしよう。昨今の教員をみる眼差しは厳しいので、こうしたところで隙をつくってしまうと、「学校の先生は、社会を知らない」などと思われてしまい、そうした不信感を子どもや保護者が持つと、指導が立ち行かなくなる。このことが分かっている面接官側は、マナーもしっかり点検している。第2章の内容をしっかりと理解し、行動で示せるようにしていこう。

第4節 志望理由と自己PR（長所含む）

(1) 志望理由

志望理由は、①そもそもなぜ、教員になりたいのか、②教員の中でもなぜ、公立を選択しているのか、③公立の中でもなぜこの受験先を受けているのかの3つを考えよう。

①については、きっかけレベルで留まるのは良くない。きっかけレベルとは、例えば、「中学時代の恩師に憧れたから」とか、「大学時代に個別指導塾のアルバイトをした際に、『分かった』と喜ぶ子どもの姿をみてやりがいを感じた」とかである。こうしたきっかけから、職業として選択するまでには、深い理解があるはずで、それに言及してこそ志望理由になる。

深い理解とは、例えば、家庭環境、本人の顕在・潜在の両面にある気持ちや意志への配慮、社会が期待する教育へのまなざし、など様々なことを念頭に置いて展開するものが学校教育であるといったことである。

②については、公立＝公務員ということなので、年功序列で年老いても給料が上がるからといった働いたときに得られる待遇的な事柄を挙げるのはよくない。もちろん、親が安心するから、周囲に自慢できるからといった他者目線も受身で評価が全く得られない。

また、私立や塾は利益追求などが発生し偏った教育であるからという私教育批判により公立を志望するという発言もおかしい。そもそも民間企業や家計の納める税金がなければ公教育も成り立たないし、公立は教育基本法以下の教育法規の体系に表れている特定の価値観を体現しており、偏っていないわけではない（例えば、主体的・対話的で深い学びを意識した授業づくり、プログラミング教育の実施などは、教育をめぐる一つの価値観を示している）。

このように考えれば、②は公教育が展開する教育活動に共感し、携わりたいとの姿勢が求められることになる。

③は、単に「志望理由は何ですか？」と聞かれたときに「答える内容の中心」である。しかし、指導上、忘れてしまう方が多い。これは、違う職種で置き換えてみればおかしいことに気づくだろう。例えば、自動車整備士として仕事を探している人が、どの自動車メーカーの工場で働きたいかを語るときに、トヨタのここがいい、ホンダのこの点に共感したと述べるはずだ。

これと同じように、受験自治体でなぜ教員をしたいのかが中心になるよう志望理由を作成しよう。①や②は個人面接で「つつこみ」を受けたとき用に準備するか、さらっと触れる程度にしておきたい。

【発言例】

私は〇〇県が目指す××な点に共感し、私も高校教員として是非この実現に尽力したいと考え、志望致しました。特に、県の第〇次教育振興計画にある「県立高校魅力化事業」については、私自身、高校時代に△△のプログラムを推進する県内の高校で学べたことが、大学で学びたいことを発見することにつながり意義深かったため、次は自分が教員として関われたらと考えております。他にも、教員研修が盛んで、授業資料の共有化が進むなど、切磋琢磨して良い授業を作り上げようとする県教員が作り上げている風土にも惹かれております。

入職後は、どの人も社会を形成するかけがえのない存在であるという人権感覚を伝えると共に、出会った生徒がその中で輝けるよう努力する際に最大限の支援ができる教員として励む決意で志望しております。

（解説）

- ・波線は、県の教育政策を理解していることで導かれる。受験自治体の教育政策と教職員の取り組みはしっかり調べておこう。できれば、教員採用説明会にも参加し、情報を得るようにしておきたい。
- ・二重線は、地元生でゆかりがあるということと、受験自治体の教育政策をさりげなく褒める形でアピールしている（と同時に、教員を目指すきっかけの一つという面もみえてくる）ため好印象である。地元生でない場合でも、進学を機に住み実習で経験したからなどの関連性あるエピソードがあればなるべく触れよう。これらが全くない場合は教育資源に触れるなどすると良い。
- ・2段落目は、どのように働いていくかの決意という形で志望を述べている。こうすると、熱意が伝わりやすい。また、受験者の深い教育観も分かる。これは、上述の①、②を考えたからこそ出てくるもので、もしも、「教員自体をどうして志望しているか」という問いになればこの部分が中心の回答となる。

(2) 自己PR（関連で長所も）

自己PRとして、単なる長所を挙げる受験生に過去何度も出会ってきた。しかし、PRとは、相手に良いなと思ってもらわないといけない。そして、その相手とは、校長先生をしている人が中心の面接官である。

このことを考えれば、**教職に向いている自身の適性を売り込まなければならない**だろう。このとき、**志望理由との兼ね合いも大切**となる。例えば、「子どもたちがわくわく仲間と共に学べるような教育活動を展開したい」という趣旨の志望理由を述べる予定の小学校志望者と、「多感な時期である生徒に対し、様々な価値観を伝えながら共生の大切さと、自分自身を研鑽し自己実現へ向かおうとすることの意義を学校で伝えていきたい」と語る予定の中学校志望者では、自分の売り込むべきPRポイントは自ずと変わってくる。前者なら発達段階に合わせたファシリテーター役としての力が、後者なら悩める人に寄り添いつつ適切な助言ができる力が、自己PRや長所になるだろう。

ぜひとも、面接官に、「**そうそう。教職につくならその力欲しいよね**」、「**受験生自身のやりたいことができそうな力があるのだな**」と思われる自己PRをつくって欲しい。

なお、自己PRは聞かれたら1つを話そう。これには理由が2つある。第1に、**自己PRには根拠が必要だからだ**。例えば、「私は人と丁寧に接することができる」とだけ言われても、「本当にそうなの？ 根拠は何だろう」と面接官は思ってしまう。ここで、「大学時代は放課後等デイサービスのボランティアをしており、サービス利用者の子どもと接する際には、最後まで話を聞くことを心掛けておりました。そうしたところ、職員さんから丁寧に接していると褒められました」といったエピソードがつくと納得する。ということは、複数の自己PRを挙げて、1つずつにエピソードを話していると発言時間が長くなってしまう。

第2に、他の質問も、聞き方を変えているが、結局は自己PRとなっているものが数多いからだ。例えば、「長所は何ですか」は、自己PRで発言準備した以外のPR点を出せと言われているに過ぎない。他にも、「大学時代に成長した点は何か」、「近年頑張ったことは何か」、「友人（親）からはどのような人物といわれるか」、「教員に自分が向いている点は何か」なども、結局、教職に就く上での売り込むポイントを述べなくてはならない意味では、自己PRである。だから、**自己PRは何ですかという質問では1つだけを答える**。そして、自分の良い点を話すことになる他の質問に向けて残しておかなくてはならない。

これは裏返すと、**自己PRを含め、自分の売り込むべき長所を4つか5つ用意しておかなくてはならない**ということだ。そして、面接では、自分を売り込める質問がきたら、お勧め順位にしたがって、それを出さなければならない。その意味で、次頁の表のようなものを作成し、発言準備をすると良い（表内は具体例。本来同一人物で4～5つだが、便宜上、学生と社会人の想定で分けて記載）。

なお、エピソードはなるべく直近3年前までを使おう。また、教員免許を除く資格取得などなら良いが、受験勉強などは出さないようにしよう。